

(別紙4)

愛知県における効果的な捕獲に係る技術開発計画/評価報告
(効果的捕獲促進事業)

1 対象指定管理鳥獣の種類及び技術名

指定管理鳥獣名	イノシシ
技術名	新型扉を用いた捕獲技術の開発
実施体制	捕獲部分のみ委託
事業費	869千円 (捕獲部分のみ)

2 現状の指定管理鳥獣捕獲等事業による捕獲の目的・目標、実施状況、効果、課題等

渥美半島地区では、野生イノシシの根絶を目指し、令和元年度より地域全体で捕獲強化の取組を進めてきた。この取組により、野生イノシシの生息数が減少してきたことから、今後捕獲効率が大幅に低下することが想定される。このため、野生イノシシの根絶に向け、低密度に分布し、従来のわなに慣れた野生イノシシの効率的な捕獲方法の検討と試験的捕獲を実施する。

注：捕獲等事業によって目指す地域の状況や、軽減したい被害に関する目標、そのために必要な密度低減の考え方や捕獲数、捕獲の実施状況・効果・課題等を記載すること。

3 開発技術の目的・必要性・具体的な内容・効果等

- ・イノシシを効果的に捕獲するため、行動学的な特徴や生態を押さえた技術開発を行っており、畏への警戒心を和らげる新型囲い罠として、イノシシが自ら押すとゲートが動くというリアクションで興味を持たせるため、押すと横に開く扉を開発し、短期間で成獣2頭を捕獲でき、日本生態学会で発表した (R7.3.18)。
- ・しかし、長期間使用し続けると警戒心が高まるため、複数のタイプのワナを用意する必要がある。
- ・今回、開発する技術の特徴は、「可動式の二重扉」を捕獲檻の侵入口に取り付け、イノシシの興味を喚起して誘引することである。
(基礎試験では、捕獲檻内へ侵入を確認。)
- ・なお、前年度試験では二重扉が若干重く (7.5kg)、途中で持ち上げを断念する様子が見られたことから、「扉を軽量化」したうえで、試験を実施した。
- ・試験捕獲を実施した罠は、次の①～③のとおり。
①捕獲装置A (7/28～11/3)

押すと扉が前方に開き、潜って進入するゲートAを取り付けた囲い罟。

②捕獲装置 α (11/4~12/11)

曲げたワイヤーメッシュを地面に立てて固定し、押し分けて進入する、ゲート α を取り付けた囲い罟。

③捕獲装置C (12/11~1/13)

ゲートCを取り付けた囲い罟。

- ・試験捕獲の結果、捕獲装置A、捕獲装置 α では捕獲できなかったが、捕獲装置Cで1頭捕獲した。
- ・捕獲装置Cでは短期間で馴化されることが確認されており、低密度に分布し、警戒心の強いイノシシの効率的な捕獲が期待できる。

注1：開発技術の具体的な内容については、開発方法、開発体制、技術の特徴、開発場所、開発日程、導入効果、成果目標、有効性、普及性、既存の技術との比較など分かりやすく記述すること。

注2：開発する技術の仕組み等が分かる資料を添付すること。

注3：2を踏まえて技術開発の目的・必要性を記載するとともに、想定される効果等記載すること。

注4：事業終了後の評価報告においては注1~3について実施した内容・結果を記載すること。

4 技術の効果の検証・評価方法/結果

- ・捕獲体制に入り、自動撮影カメラで撮影する。イノシシの動き、扉の動き等を観察し、改良を加えていく。罟の素材、作成方法についても改良を加えていく。実際の捕獲により、効果を検証した。
- ・自動撮影カメラデータからイノシシの捕獲装置A、 α 、Cのゲートへの進入段階（触れる段階、囲い罟の中に足を入れ踏み込む段階）を確認することで馴化状況を評価した。
- ・評価の結果、捕獲装置Cは捕獲装置A、 α よりも短期間の稼働にも関わらず、囲い罟の中に踏み込む個体の割合が高かった。このことから、捕獲装置Cは他の装置と比べ、イノシシを比較的早く罟に馴化させる性質があると考えられる。

注：3を踏まえ、実施結果の確認方法や目的・目標に対する開発技術の効果を図るための指標（被害指標や密度指標等）やその収集方法、評価の方法等について記入すること（事業終了後の評価報告においては、その評価結果を具体的に記入すること。）。

5 技術の活用・普及方法、その他

開発した新型囲い罟の作成・捕獲マニュアルを周知し、指定管理鳥獣捕獲等事業、有害鳥獣捕獲で活用していく。

注1：技術開発に当たって、特記すべき事項があれば記入すること。

注2：事業終了後の評価報告において、特記事項に対するコメントがあれば記入すること。